戦中期日本における「陸上戦技」の誕生とその地域的展開について
-大阪府における実態に基づいて-

高見哉多

【序章】

本研究の背景は、陸上競技の通史における、1942 年から 1945 年の歴史に対する記述の浅薄さにある。例えば、『日本陸上競技連盟七十年史』（日本陸上競技連盟、1995 年。）は、1942 年から 1945 年を「空白の時代」や「陸上競技消える」と称しており、当時の陸上競技の様子を窺い知るには余りにも詳細を欠いている。また、1942 年に日本国内のアマチュア・スポーツの統括団体であった大日本体育協会が解散し、代わりに東條英機内閣総理大臣を会長に据える大日本体育会が発会した。この大日本体育会は政府の外郭組織としての機能を持つ団体であり、それまで体育・スポーツの自由主義的風潮を支えてきた体育協会とは大きく性格が異なる組織であった。この改組を受けて日本陸上競技連盟も解散を余儀なくされ、新たに大日本体育会の下部組織、陸上「戦技」部（会）として再編成されたのである。それに伴い、陸上競技の名称は陸上「戦技」へと変更され、種目についても一部戦時下に特有な種目が含まれるようになった。こうした歴史については概説的には紹介されているものの、そのほとんどが「戦技」化さなされたという事実のみを端的に紹介する程度に留まっている。

したがって本研究の目的は陸上競技の通史において棄却されてきた戦時下における陸上競技「戦技」化の歴史を実証的に再現することにあった。この目的の達成のため、本研究における研究対象を、1)大日本体育会と日本陸上競技連盟の関係性、2)陸上「戦技」の実施構想、3)大阪府における陸上「戦技」の実施状況、の 3 点に定めた。また対象とする年代として、棄却されてきた歴史に焦点を当てるという先述の目的に即して、1942 年から 1945 年までとした。なお、史料の収集に関しては国立国会図書館サーチ(NDL サーチ)や、朝日新聞クロスサーチなどのデータベースでの資料検索に加え、大阪府立図書館や大阪府公文書館及び他大学大学図書館での史料収集を行い、適宜内容を補完した。

なお、本研究論文は序論、本論、結論にて構成される。そのうち本論については、第一章を、陸上「戦技」の誕生、とし、第二章を、陸上「戦技」の地域的展開-大阪府を事例に-、と定め二部構成にて論じた。

【本論】

第一章　陸上「戦技」の誕生

1942 年に発会した大日本体育会は部会制にて運営されることが決定しており、国内のスポーツ協会の大部分を包摂する組織として出発した。陸上競技連盟についても例外ではなく、1942 年 5 月下旬には日本陸上競技連盟と陸軍戸山学校関係者との会談が実施された。この会談では「陸軍競技刷新要項」が作成され、その中身は陸上競技の名称変更や、自由主義的風潮の排除、武装種目や野外不整地で行われる訓練的種目の挿入などが含まれていた（伊藤寛、1942 年。）。こうした軍関係者の意向が如実に現れる形で 1942 年 10 月には大日本体育会陸上「戦技」部（会）が発足した。陸上「戦技」部の発足に際して、会長の平沼亮三を含む旧・日本陸上競技連盟の役員の数名はそのまま陸上「戦技」部の役員に就任したが、一方で連盟外から軍関係者を含む 4 名が新たに陸上「戦技」部の役員として招聘された。以下の表 1 は陸上「戦技」部発足にあたって招聘された役員の一覧である。なお、日本陸上競技連盟以外から新しく招聘された人物については名前の頭に★を付している。

表 1　陸上「戦技」部の役員について

部会長	平沼　亮三
副部会長	春日　弘
	山本　忠興
	★村井俊雄 (陸軍中将)
常務理事	得能　末吉
	窪田　重耐
	白田　六郎
	森田　俊彦
	山岸　徳平
理事	★河野　省介 (陸軍省兵務課)
	★村岡　安 (陸軍戸山学校)
	★師尾　源蔵 (戦場運動連盟)

（朝日新聞 1942 年 10 月 7 日、p3 より筆者作成）

新たに陸上「戦技」部に招聘された村井俊雄陸軍中将は*「戦時に役立たぬ競技などは自爆すべきだ。あらゆる旧態スポーツは一擲し、戦闘に即する国防競技に重点を置くべきだ」*（著者不明、1942 年、pp18-19。）と論考を寄せており、非常に急進的な思想の人物であった。このような急進派を役員に置く陸上「戦技」部であったため、陸上「戦技」の内容も従来の陸上競技から大きく変更することとなった。

続いて陸上「戦技」の実施構想について、陸上「戦技」部指導部長の森田俊彦による解説書『陸上戦技』（愛之事業社、1943 年。）および『女子陸上戦技』（新教出版社、1945 年。）では、陸上「戦技」の種目は「単一種目」、「協同種目」、「総合種目」に大別されると説明されている。なお、以下の表 2 および表 3 は男女のそれぞれにおける「単一種目」を示したものである。なお、どちらの表においても、戦時下に特有である種目については先頭に★をつけて表記している。

表 2　男子単一種目の種目

競走	100 メートル競走
	400 メートル競走
	★2 キロメートル競走
	10 キロメートル競走
	★25 キロメートル競走
	★800 メートル障害競走
跳躍	走幅跳
	走高跳
投擲	★手榴弾投
	★重錘投

（森田俊彦、1943 年、pp11-12
より筆者作成。）

表 3　女子単一種目の種目

競走	★60 メートル競走
	100 メートル競走
跳躍	走幅跳
	走高跳
投擲	★短棒投
運搬	★重量運搬競走

（森田俊彦、1945 年、p13 より筆者作成）

また、陸上「戦技」の最終到達目標は男女共に「総合種目」にあり、男子の場合は「総合戦技」が、女子の場合には「体力章競技」が最高到達点であるとされた。「総合戦技」とは野走、水泳、射撃、武道から構成される種目であり、これらの種目に要した時間経過を競う種目であった。体力章競技とは、1939 年に制定された（女子については 1943 年から実施）体力章検定を競技化したものであり、国民錬成の象徴としての機能が期待された種目である。

上記の種目（総合戦技や体力章競技）のように、総力戦体制下に特有の性格を持った種目が陸上「戦技」で実施される構想であったのと対照的に、「単一種目」には 100 メートル競走や走幅跳などの種目は暫定的に保存されていた。また男女のどちらにおいても、競技規則などの面では従来の競技性をある程度担保するように設計されていたが、このことを鑑みると、戦中期の陸上競技の「戦技」化は単純な陸上競技の消滅とは評価し難い様相を呈していたと言える。つまり、陸上競技「戦技」化は即座に陸上競技の断絶を意味したわけではなく、陸上競技の連続性の一部として位置付けられる可能性を示して、第一章の結びとした。

第二章　陸上「戦技」の地域的展開
-大阪府を事例に-

大阪府においては 1943 年 5 月に中モズ競技場で行われた「大阪陸上競技協会解散競技会」をもって、大阪陸上競技協会が解散する運びとなった。また、その後新たに陸上「戦技」部会大阪府支部のような組織が再編成された史実は確認できなかった。しかしながら、大阪府の公文書の記録では、大阪府内の体育・スポーツに関する業務を行う団体として「大日本体育会大阪府支部」および「大日本学徒体育振興会大阪府支部」が存在していたことが確認できた。これらの記録は大阪府陸上競技協会の解散後は、陸上「戦技」を直接的に管轄する団体は不在であったとしても、上記の 2 団体が陸上「戦技」の競技会の開催を担っていたことを示唆している。また、大阪府においては 1942 年 10 月の時点で、防空緑地を活用した大規模な戦場運動場の整備に着手しており、陸上競技場を含む日本随一の陸上「戦技」場の建設に着手していたことが明らかとなった（朝日新聞、1942 年 10 月 18 日、p4）。また、大阪府南郊の上野芝では「総合戦技場」の整備が行われ、実際に同競技場では関西陸上「戦技」錬成大会が実施されたことも確認された（朝日新聞、1943 年 8 月 3 日）。

一方で、1943 年 1 月 31 日には比較的規模の大きい「楠公遺跡巡歴駅伝競走」が府下の旧制中学校を対象に開催された。この駅伝競走は戦前より行われていた駅伝競走大会だったものの、戦中期に報国団が結成されてからより多くの参加校数を記録したという点で特徴的な競技会である。この楠公史跡巡歴駅伝競走大会を含め、1942 年 10 月から 1945 年 8 月の終戦に至るま

でに大阪府内で確認された公式の競技会について以下の表 2 に示した。なお、表中の楠公史跡巡歴駅伝に関しては、場所が長距離にわたる走路であるため、表中では※を付して表記している。

表 4　大阪府で開催された公式の競技会一覧（1942/10-終戦まで）

日時	競技会の名称	場所
1942/11/8	第 1 回大阪府中等学校報国団陸上競技大会	中モズ
1942/11/29	大阪市、大阪体育協会主催秋季大阪市民錬成総合大会	不明
1943/1/31	第 1 回大阪府中等学校報国団楠公史跡巡歴駅伝競走	※
1943/5/22	大阪陸上競技協会解散競技会	中モズ
1943/7/4	第 2 回大阪府中等学校報国団戦場運動班錬成大会	中モズ
1943/7/31	関西陸上戦技錬成大会	上野芝
1943/8/1	関西陸上競技錬成大会	中モズ
1943/9(某日)	第 2 回大阪府中等学校報国団大会	中モズ
1943/9/25-26	第 2 回大阪府男子中等学校総合体育大会	中モズ
1943/11/14	第 2 回府下中等学校報国団陸上運動錬成大会兼学年別陸上競技大会	中モズ
1943/11/21	戦場運動大阪中等学校大会	中モズ
1944/2/13	第 2 回大阪府中等学校報国団楠公史跡巡歴駅伝競走	※
1944/5/28	第 3 回大阪府中等学校報国団楠公史跡巡歴駅伝競走	※

（大阪陸上競技協会、1995 年、pp36-37、岸和田高等学校陸上競技部千亀利会、1983 年、pp167-169、桃陰択走会、2018 年、p181、六稜アスレティッククラブ、1974 年、pp109-115、および朝日新聞、1943 年 8 月 3 日、p4 より筆者作成。）

また、公式的な競技会が開催されない中でも北野中をはじめとし、周辺の豊中中、市岡中、岸和田中、天王寺中などによって学校間での対校戦は行われていた。以下の表 2 は大阪府において 1942 年 10 月以降から 1945 年の終戦を迎えるまでに観測された対校戦の一覧である。

表 5　大阪府における対校戦一覧（1942/10-終戦まで）

日時	競技会の名称	場所
1942/11/29	第 16 回北野、市岡対抗競技会	大阪商大
1943/4/29	第 2 回北野・岸和田対抗競技会	北野校庭
1943/10/3	北野、市岡、豊中三校対抗競技会	豊中校庭
1944/5/14	北野、岸和田、天王寺三校対抗競技会	中モズ
1944/8/14	北野、豊中（二部）練習対抗競技会	豊中校庭

（岸和田高等学校陸上競技部千亀利会、1983 年、pp168-169 および六稜アスレティッククラブ、1974 年、pp109-115 より筆者作成）

また、以下の表 3 は「北野、市岡、豊中三校対抗競技会」にて実施された種目の一覧である。

表 6　北野、市岡、豊中三校対抗競技会の実施種目(1943/10/3)

単一種目	100 メートル走
	200 メートル走
	400 メートル走
	2000 メートル走
	走高跳
	走幅跳
	砲丸投
	手榴弾投
協同種目	800 メートル継走

（六稜アスレティッククラブ、1974 年、pp109-115 より筆者作成）

対校戦では限定的に陸上「戦技」に特有の種目も見られたものの、構成される種目の多くは従来の陸上競技の種目であり、戦場運動や総合戦技などの種目は確認されなかった。また、対校戦は公的団体による競技会の開催が確認できなかった 1944 年以降にも開催されていながらも、競技種目に従来性が認められたという点で特徴的であった。

上記の事柄より、大阪府においても確かに陸上「戦技」の影響は認められ、競技として運用される側面を確認できたものの、楠公史跡巡歴駅伝競走大会や学校間の対校戦のように、戦局が悪化する中でも非「戦技」的な側面を併せ持ち続

けた競技会を確認することができた。このことは、陸上競技の「戦技」化の影響は地方においても影響力を持って伝播していたものの、「戦技」の内容が即座に受容されたわけではないことを示す。

【結論】

1942年以降の陸上競技は軍関係者の意向に大きく影響を受け、陸上「戦技」へと名称の変更を余儀なくされた。また陸上「戦技」を構成する種目には、戦時下特有の戦場運動や総合戦技が含まれており、こうした観点では陸上競技からの脱却といえる転換がなされた。一方で、陸上「戦技」への転換に伴い、すべての陸上競技種目が棄却されたわけではなく、「戦時下においても国民錬成に貢献しうる」という解釈がなされた種目は陸上「戦技」の種目に含まれた。また、陸上「戦技」部の役員も一部急進的な人物を含んではいたものの、大部分は旧・日本陸上競技連盟の人物から構成されていたことも明らかとなった。これらの史実が示すのは、1942年の陸上競技の「戦技」化は陸上競技の断絶を意味せず、一定の連続性の中に位置づけることができるということである。これは従来の陸上競技の通史的理解に新しい解釈を与えうるものであり、戦中期における陸上競技史の実証的再現に貢献しうると考えられる理解である。

また、大阪府においても戦争の影響を受けて、軍事的利用に伴う競技場の閉鎖や、戦時下特有の競技を実施する競技場の建築などが進められた。また、公的団体による陸上「戦技」大会や錬成大会も開催され、こうした点では陸上「戦技」は地域的にも展開されたと言える。一方で、報国団による「楠公遺跡巡歴駅伝競走」や学校間での対校戦が戦局の悪化という背景の中でも開催されていたことが、一次史料および周辺史料に基づく調査の結果明らかとなった。

以上の事柄より、陸上競技の通史における1942年から1945年の「陸上競技の消滅」という時代的評価は、史実に対する詳細な理解を欠いている可能性について指摘して本論文の結論とした。

なお、本研究の課題については以下に示す通りである。

①陸上「戦技」の成立過程における陸上競技連盟側の意向の解明
②女子陸上「戦技」の実態の検討
③大阪府以外の地域における陸上「戦技」の展開についての検討

①に関しては、本研究で収集することができた史料が、主に軍関係者の意向について紹介したものに偏っていたという課題が挙げられる。本研究において日本陸上競技連盟の関係者が陸上競技の「戦技」化をどのように解釈していたのか明らかにすることができなかった点は本研究の課題である。②の女子陸上「戦技」の実態についても、①における課題と同様に、女子の陸上「戦技」の実態に関する史料を十分に収集できなかったことが課題であると言える。③に関しては、大阪府以外の地域における陸上「戦技」の実態について検討をすることで、より包括的に陸上競技の「戦技」化についての議論を行うことができると考えた。これらの課題を解消することにより、本研究の冒頭にて述べた、「陸上競技の通史における戦中期の実証的再現」という目的により寄与できるとして本研究の結びとした。

【主要参考文献】

（単行本）
大阪陸上競技協会『大阪陸上競技協会・七十年史』、大阪陸上競技協会、1992年。
日本陸上競技連盟七十年史編集委員会(編)『日本陸上競技連盟七十年史』、日本陸上競技連盟、1995年。
森田俊彦『陸上戦技』愛之事業社、1943年。
森田俊彦『女子陸上戦技』新教出版社、1945年。

（雑誌論考）
伊藤寛「陸上戦技部の誕生について」、『アサヒ・スポーツ』12月号、朝日新聞社、1942年、pp4-5。
著者不明「国民体力錬成の新展開 -陸連の発展的解消と「陸上戦技部」の発足に就て-」、『体力』体位向上会、1942年、pp18-22。

（学校史・陸上競技部史）
岸和田高等学校陸上競技部千亀利会『部史 ： 岸和田高等学校陸上競技部』、1983年。
桃陰択走会『天王寺陸上部100年史』、桃陰択走会、2018年。
六稜アスレティッククラブ『北野陸上競技部史』、柴原出版、1974年。

〔指導教員：秋元忍〕